夜叉ケ池

場所。越前国大野郡鹿見村琴弾谷

時。現代　盛夏。

人名。鐘楼守。　萩原晃。

娘。　百合。

文学士。　山沢学円。

夜叉ヶ池の主。　白雪姫。

眷属。　湯の尾峠の万年姥。

白男の鯉七。

大蟹五郎。

木の芽峠の山椿。

鯖江太郎　虎杖の入道。

鯖波次郎　十三塚の骨。

夥多の影法師。

黒和尚鯰入。

剣ヶ峰の使者。

鹿見村百姓。　与十。
神官。　其の他大勢。
村会議員。　鹿見宅膳。
小学教師。　権藤管八。
村長。　斎田初雄。
博徒。　畑上嘉伝次。
小相撲。　伝吉。
県の代議士。　小烏風呂助。
　　穴隈鉱蔵。

劇中名を云ふもの
白山剣ヶ峰千蛇ヶ池の公達。

三国嶽の麓の里に、暮六つの鐘きこゆ。――幕を開く。

（萩原晃此の時白髪のつくり、鐘楼の上に立ちて夕陽を望みつゝあり。鐘楼は柱に蔦かゝり、高き石段に苔蒸し、棟には草生ゆ。晃やがて徐に段を下りて、清水に米を研ぐ、お百合の背後に行く。）

晃。水は、美しい。何時見ても……美しいな。

百合。えゝ（其の水の岸に菖蒲あり二三輪小さき花咲く。）

晃。綺麗な水だよ。（微笑む）

百合。（白髪の鬢に手を当てゝ）でも、白いのでございますもの。

晃。そりや、米を磨いで居るからさ……（框の縁に腰を掛く）お勝手働き御苦労、せつかくのお手を水仕事で台なしは恐多い、些とお手伝ひと行かうかな。

百合。可うございますよ。

晃。否……お手伝ひと云ふ処だが、お百合さんの然うした処は、咲残つた菖蒲を透いて、水に影が映したやうで尚ほ綺麗だ。

百合。存じません。

晃。賞めるに怒る奴がありますか。

百合。おなぶり遊ばすんでございますものを——そして旦那様は、こんな台所へ出て居らつしやるものではありません。早くお机の所へおいでなさいまし。

晃。鐘を搗く旦那はをかしい。実は権助と名を代へて早速お飯にありつきたい。何とも可恐く腹が空いて、今、鐘を搗いた撞木が、杖に成れば可いと思つた。処で居催促と云ふ形もある。

百合。ほゝゝ、又お極り。……すぐお夕飯にいたしませうねえ。

晃。手品ぢやあるまいし、磨いで居る米が、飯に早変りはしさうもないぜ。

百合。まあ、あんな事を——これは翌朝の分を仕掛けて置くのでございますよ。

晃。翌朝の分——あゝ、お世帯もち、然もあるべき事です。いや、其を聞いて安心したら、がつかりして余計空いた。

百合。何でございますねえ、……お菜も、あの、お好きな鴫焼をして上げますから、おとなしくして居らつしやいまし。お腹が空いた空いたつて、人が聞くと笑ひます。

晃。（縁を上る、）誰に遠慮がいるものか、人が笑ふのは、ね、お前、

百合。はい。

晃。お互に朝寝の時——

百合。知りませんよ。（莞爾俯向く。）

晃。煩く藪蚊が押寄せた。裏縁で燻して遣らう。（納戸、背後むきに山を仰ぐ。）……雲の峰を焼落した、三国ケ嶽は火のやうだ。西は近江、北は加賀、幽に美濃の山々峰々、数万の松明を列ねたやうに旱の焔で取巻いた。夜叉ヶ池にも映るらしい。丁ど其の水の上あたり、宵の明星の色さへ赤い。……なか〳〵雨らしい影もないな。

百合。……其の龍が棲む、夜叉ヶ池からお池の水が続くと申します、此処の清水も気の故やら、流が沢山痩せました。頃日は村方で大騒ぎをして居ます。……暑さは強し……貴方、お身体に触りはしますまいかと、——めしあがりものゝ不自由な片山里は心細い。私は其が心配でなりません。

晃。——流が細つたつて構ふものか。お前こそ、其の上夏瘠せをしないが可い。お百合さん、其の夕顔の花に、一寸手を触つて見ないか。

百合。はい、怎ういたすのでございますか。

晃。花にも葉にも露があらうね。

百合。おゝ冷い。水の手にも涼しいほど、しつとり花が濡れましたよ。

晃。世間の人には金が要らう、田地も要らう。雨もなければなるまいが、我々二人活きるには、百日照つても乾きはしない。其の、露があれば沢山なんだ。（戸外に向へる障子を閉す。）

百合。貴方、お暑うございませう。開けてお置きなさいましても、既う、其方此方人も通りますまい。

晃。何、更つて、そんな心配をするものか。……晩方閉込んで一燻し燻して置くと、蚊が大分楽になるよ。（時に蚊遣の煙なびく。）

学円。（日に焼けたるパナマ帽子、背広の服、落着のある人体也。風呂敷包を斜に負ひ、脚袢草鞋穿、杖づくりの洋傘を杖いて、鐘楼の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺め、）今朝、朝六つの橋を渡つて、こゝで暮六つの鐘を聞いた。……（お百合は笊に米をうつす。）やあ、お精が出ます。（と声を掛く。）

百合。はい。（見向く。）

学円。途中、畷の竹藪の処へ出て……暗く成つた処で、今しがた聞きました。時を打つたは此の鐘でせうな。

百合。然やうでございます。

学円。音も尊い！　……立派な鐘ぢや。鐘楼へ上つて見ても差支へはありませんか。

百合。（笊を抱へて立つ。）えゝ、大事ございません。けれども貴客、御串戯に、お杖やなんぞでお敲き遊ばしては不可ません。

学円。西瓜を買ふのではありません。決して敲いては見ますまい。（笑ふ。）

百合。御串戯おつしやいます……否、悪戯を遊ばすやうなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、其の鐘は、朝六つと暮六つと夜中丑満に一度、三度のほかは鳴らさない事になつて居りますから、失礼とは存じました

が、一寸申上げたのでございます。さあ、何うぞ御遠慮なく、上つて御覧なさいまし、（夕顔の垣根について入むとす。）

学円。あゝ、一寸……お待ち下さい。鐘も見やうと思ひますが、ふと言を交はしたを御縁に、余り不躾がましい事ぢやが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞ひ下さらんか。

百合。お易い事でございます、まあ、貴客、此へお掛けなさいまし。

学円。御免下さいよ。

百合。真に見苦しうございます。

学円。此は——お寺の庫裡とも見受ません。御本堂は離れて居ますか。

百合。否、最う昔、焼けたと申しまして、以前から寺はないのでございます。

学円。鐘ばかり……

百合。はい。

学円。鐘ばかり……成程。処で西瓜の一件ぢや。（帽子を脱ぐ、殆んど剃髪したる如き一分刈の額を撫でゝ、）や、西瓜と云へば、内に甜瓜でもありますまいか。——茶店でもない様子——（見廻す。片山家の暮れ行く風情、茅屋の低き納戸の障子に灯影映る。）此の上、晩飯の御難題は言出しませんが、如何とも腹が空いた。

百合。ほゝゝ（と打笑み、）筧の下に、梨が冷してござんす。上げませう。（と夕顔の蔭に立廻る。）

学円。（がぶ〳〵と茶を呑み、衣兜から扇子を取つて、煽いだのを、と翳して見つゝ、）おゝ、咲きました。貴女の顔を見るやうに。

百合。えゝ？（聞返す。）

学円。いや、髪の色を見るやうに……

百合。もう年をとりますと、花どころではございません。早く干瓢にでもなりますれば、と其ばかりを待つて居ります。

学円。小刀を此へお遣はし……私が剝きます。——お世話を掛けては却つて気遣ひな。どれ〳〵……旅の事欠け、不器用ながら、梨の皮ぐらゐは、うまく剝きます。おゝ〳〵氷よりよく冷えた。玉を削るとは此の事ぢやらう。

百合。旅を遊ばす御様子にお見受け申します……貴客はどれから、どれへお越しなさいますえ？

学円。扨て名告りを揚げて、何の峠を越すと云ふでもありません。御覧の通り、学校に勤めるもので、暑中休暇に見物学問と云ふ処を、遣つて歩行く……最も、帰途です。——涼しくば木の芽峠、音に聞こえた中の河内か、（廂はづれに山見る眉。）峯の茶店に茶汲女が赤前垂と云ふのが事実なら、痘疽の神の建場でも差支へん、湯の尾峠を越さうとも思ひます。——落着く前は京都ですわ。

百合。お泊りは？　貴客、今晩の。

学円。あゝ、浮かり泊りなぞお聞きなさらぬが可い。言尻に着いて、宿の御無心申さんとも限らんぞ。はゝはゝ、いや、串戯ぢや。御心配には及ばんが、何と、其の湯の尾峠の茶汲女は、今でも赤前垂ぢやらうかね。

百合。山また山の峠の中に、嘘のやうにもお思ひなさいませうが、真個だと申します。

学円。谷の姫百合も緋色に咲けば、何も其に不思議はない。が、此の通り山ばかり、重り累る、あの、巓を思

ふにつけて、……夕焼雲が、めら〳〵と巌に焼込むやうにも見える。こりや、赤前垂より、雪女郎で凄うても、中の河内が可いかも分らん。何にしろ、暑い事ぢやね、——漸つと此処で呼吸をついた。

百合。里では人死もありますツて……酷い旱でございますもの。

学円。今朝から難行苦行の体で、暑さに八九里悩みましたが、——可恐しい事には、水らしい水と云ふのを、此処へ来てはじめて見ました。此は清水と見えます。

百合。裏の崖から湧きますのを、筧にうけて落します……細い流でございますが、石に当つて、りん〳〵と佳い音がしますので、此の谷を、あの琴弾谷と申します。貴客、それは、おいしい冷い清水。……一杯汲んで差上げませうか。

学円。何が今まで我慢が出来やう、鐘堂も知らない前に、此の美い水を見ると、逆觔斗で口をつけて、手で引掴んで、がぶ〳〵と。

百合。まあ、私は何うしませう、知らずにお米を研ぎました。

学円。いや、しらげ水は菖蒲の絞、夕顔の花の化粧に成つたと見えて、下流の水は矢張り水晶。さゝ濁りもしなかつた。が、村里一統、飲む水には困るらしく見受けたに、此処の源まで来ないのは格別、流れを汲取るものもなかつたやうに思ふ……何ぞ仔細のある事ぢやらうか。

百合。あの、湧きますのは、裏の崖でございますけれど。

学円。はあ、はあ。……

百合。水の源は此の山奥に、夜叉ヶ池と申します。凄い大池がございます。其の水底には龍が棲む、其処へ通

ふと云ひまして、――毒があると可恐がります。――最う薄暗くて見えますまいけれども、其の貴客、流の石には、水がかゝつて、紫だの、緑だの、口紅ほどな小粒も交つて、其は綺麗でございますのを、お池の主の眷属の鱗がこぼれたなんのツて、気味が悪いと申すんでございますから……

学円。綺麗な石が毒蛇の鱗？　や、がぶ〳〵と、豪いことを遣つて了ふた。（と扇子を以て胸を打つ。）

百合。まあ、（と微笑み、）私どもが此の年まで朝夕飲んで何ともない。其をあの、人は疑ふのでございます。

学円。最も、最も。ものを疑ふのは人間の習ひですよ。私は今のお言で、決して心配はしますまい。現に朝夕飲んで居らるゝ、――此の年紀まで――（と打ち瞻り、）お幾歳ぢやな。

百合。……

学円。まあさ、失礼ぢやが、お幾歳です？

百合。御免なさいまし、……忘れました。……

学円。はゝゝ、俚言にも、婦人に対して、貴女は何時死ぬとは問うても可い。が、何時生れた、とは聞くな――とある。此は無遠慮に出過ぎました。……お幾歳ぢやと年紀は尋ねますまい。時に幾干ですか。

百合。幾干かとおつしやつて？

学円。代価ぢや。

百合。あの、お代、何の？……お宝……ま、滅相な。お茶代なぞ頂くのではないのでござんす。

学円。茶も茶ぢやが、いやあ此は、髯のやうにもぢやもぢやと聞えてをかしい。茶も勿論、梨を十分に頂いた。お商売でなうても無代価では心苦しい。づばりと余計なら黙つても差置きますが、旅空なり、御覧の通りの風体。

丁と云ふて取つて下さい。

百合。然うまでお気が済みませんなら、少々お代を頂きませうか。

学円。勿論ともな。

百合。でも、あの、お代とさへ申しますもの、お宝には限りません。其のかはり、短いのでも可うございます、お談話を一つ、お聞かせなすつて下さいましな。

学円。談話をせい、……談話とは？

百合。方々旅を遊ばした、面白い、珍らしい、お話しでございます。

学円。その談話を？

百合。はい、お代のかはりに頂きます。貴客には限りませず、薬売の衆、行者、巡礼、此の村里の人たちにもお間に合ふものがございまして、其のお代をと云ふ方には、誰方にも、お談話を一条づゝ伺ひます。沢山お聞かせ下さいますと、お泊め申しもするのでございます。

学円。むゝ、此こそ談話ぢや、（と小膝を拍て、）面白い。話しませう。……が、扨て談話と云ふて、差当り——お茶代に成るのぢやからつて、長崎から強飯でもあるまいな。や、思出した。然も此の越前ぢや。

晃。（細く障子を開き差覗く、時に小机に向ひたり。双紙を開き筆を取つて、客の物語る所をかき取らむとしたるなるが、学円と双方、ふと面を合はせて、何とかしけむ、燈火を弗と消す。）

百合。どんなお話、もし、貴客。

学円。……時に此処で話すのを、貴女のほかに聞く人がありますかね。

百合。否、外にはお月様ばかりでござんす。

学円。道理こそ燈が消えて、あゝ、蚊遣の煙で、よくは見えぬが、……納戸に月が射すらしい――お待ちなさい。今、言ひかけた越前の話と云ふのは、縁の下で牡丹餅が化けたのです。たとへば、こゝで私がものを云ふと、其の通り、縁の下で口真似をする奴がある。村中が寄つて集つて、口真似するは何ものぢや、狐か、と聞くと違ふと答へる。狸か、違う、獺か、違う、魔か、天狗か、違う、違う。……しまひに牡丹餅か、と尋ねた時、応と云つて消え失せたと云ふ――其の話をする気であつたが、……まだ外に、月が聞くと言はるゝから、出直して、別の談話をする気に成つた。お聞きなさい。此は現在一昨年の夏――

一人、私の親友に、何か予て志す……国々に伝はつた面白い、又異つた、不思議な物語を集めて見たい。日本中残らずとは思ふが、此夏は山深い北国筋の谷を渡り峰を伝つて尋ねやう、と夏休みに東京を出ました――其切、行衛が知れず、音沙汰なし。親兄弟もある人物、出来る限り、手を尽して捜したが、皆目跡形が了らんから、われ〳〵友だちの間にも、最早や世にない、死んだものと断念めて、都を出た日を命日にする始末。いや、一時は新聞沙汰、世間で豪い騒ぎをした。……

自殺か、怪我か、変死かと、果敢ない事に、寄ると触ると、袂を絞つて言交はすぞ！　あとを隠すにも、死ぬのにも、何の理由もない男ぢやに、貴女、世間には変つた事がありませうな……

百合。あゝ、貴客、貴客、難有う存じます。……真個に難有う存じました。（とにべなく言ふ。）

学円。そんなに礼を云ふて、茶代のかはりに成るのですかい。

百合。最う沢山でございます。

学円。それでは面白かつたのぢやね。

百合。……おもしろいのは、前の牡丹餅の化けた方、あとのは沢山でございます。

学円。扨て談話は此からなんぢや、今のは真個の前提ですが。

百合。何うぞ、……結構でございますから、――而して貴客、既う暗く成ります、お宿をお取り遊ばすにも御不自由でござりませうから。……

学円。いや〳〵、談話の模様では、宿をする事もあると言はれた。私も一つ泊めて下さい、――此の談話は実があります。

百合。前刻は、貴客、女の口から泊りの事なぞ聞くんぢやない。……其の言について、宿の無心でもされたら何うするとおつしやつて……最う、清い涼いお方だと思ひましたものを、――女ばかり居る処で、宿貸せなぞと。そんな事、……もう、私は気味が悪い。

学円。気味が悪いな？　牡丹餅の化けたのではないのですが、

百合。こんな山家は、お化より、都の人が可恐うございます、……さ、貴客何うぞ。

学円。此は、押出されるは酷い。（不承々々に立つ。）

百合。（続いて出で、押遣るばかりに、）何うぞ、お立ち下さいまし。

学円。婦人ばかりぢや、兎や角うも言はれぬか。鉢の木ではないのぢやが、蚊に焚く柴もあるものを、……常世の宿なら、恁う情なくは扱ふまい。……雪の降らぬがせめてもぢや。

百合。真夏土用の百日旱に、たとへ雪が降らうとも、……（と立ちながら、納戸の方を熟と視て、学円に瞳を

返す。）御機嫌よう。

学円。失礼します。

晃。（衝と蚊遣の中に姿を顕はし、）山沢、山沢、（ときつぱり呼ぶ。）

学円。おい、萩原、萩原か。

百合。あれ、貴方、（と走り寄つて、出足を留めるやうに、膝を突き手に晃の胸を圧へる。）

晃。帰りやしない、大丈夫、大丈夫、（と低声に云つて、）何とも言ひやうがない、山沢、まあ——まあ、此方へ。

学円。私も何とも言ひやうが無い。十に九ツ君だらうと、今ね、顔を見た時、又先刻からの様子でも然う思ふた。けれども、余り思掛けなし——（引返して框に来り、）第一其の頭は何うしたい？

晃。頭も何うかして居ると思つて、まあ、許して上つてくれ。

学円。埃ばかりぢや、失敬するぞ、（と足を拭いたなりで座に入る、）いや、其の頭も頭ぢやが、白髪は何うぢや、白髪はよ？……

晃。此か、谷底に棲めばと云つて、大蛇に呑まれた次第ではない、こいつは仮髪だ。（脱いで棄てる。）

学円。はゝあ、……（とお百合を密と見て、）勿論ぢやな、其の何も……

晃。こりや、百合と云ふ、（お百合、座に直つた晃の膝に、其のまゝ俯伏しに縋つて居る。）

学円。お百合さんか、細君も……何、奥方も……

晃。泣く奴があるか。涙を拭いて、整然として、御挨拶しな。（と言ふうちに、極り悪さうに、お百合は衝と

納戸へかくれる。）君に脊中を敲かれて、僕の夢が覚めた処で、東京へ帰るかつて憂慮ひなんです。

学円。（お百合の優しさに、涙もろく、ほろりとしながら、）いや、私の顔を見たぐらゐで、萩原――此の夢は覚めんぢやらう。……何、いゝ夢なら敢て覚めるには及ばんのぢや……しかし萩原、夢の裡にも忘れまいが、東京の君の内では親御はじめ、

晃。むゝ、

学円。君の事で、多少、それは、寿命は縮められたか了らんが、皆先づ御無事ぢや。

晃。あゝ、然うか。難有い。

学円。私に礼には及ばない。

晃。実に済まん！

学円。扨て此は何うしたわけぢや。

晃。夢だと思つて聞いてくれ。

学円。勿論夢だと思ふて居る……

晃。悉しい事は、夜すがらにも話すとして、知つてる通り……、僕は、それ諸国の物語を聞かうと思つて、北国筋を歩行いたんだ。処が、自身……僕、其のものが一条の物語に成つた訳だ。――魔法つかひは山を取つて海に移す、人間を樹にもする、石にもする、石を取つて木の葉にもする、木の葉を蛙にもすると言ふ、……君も此処へ来たばかりで、もの語の中の人に成つたらう……僕は最う一層、其の上を、物語、其のものに成つたんだ。

学円。薄気味の悪い事を云ふな。では、君の細君は、……（云ひつゝ憚る。）

晃。（納戸を振向く。）衣服でも着換へるか、髪など撫つけて居るだらう。……襖一重だから、背戸へ出た。……

学円。（伸上り納戸越に透かし見て、）おい、水があるか蘆の葉の前に、櫛にも月の光が射して、仮髪をはづした髪の艶、雪国と聞く故か、まだ消残つて白いやうに、襟脚、背筋も透通る。……凄いまで美しいが、……何か、細君は魔法つかひか。

晃。可哀想な事を言へ、まさか、

学円。ふん。

晃。此の土地、此の里――此の琴弾谷が、一個の魔法つかひだと云ふんだよ。――

山沢、君は、此の山奥の、夜叉ヶ池と云ふのを聞いたか。

学円。聞いた、然も其の池を見やうと思つて、今庄駅から五里ばかり、態々此処まで入込んだのぢや。

晃。僕も一昨年、其の池を見やうと思つて、此の谷へ入つたゝめに、恁う云ふ次第に成つたんだ。――こゝに鐘がある――

学円。ある！　何にか朝六つ暮六つ……丑満、と一昼夜に三度鳴らす。其の他は一切音をさせない定ぢやと聞いたが、

晃。然うだよ。定として、他は一切音をさせてはならないと一所にな、一日一夜に三度づゝは必ず鳴らさねばならないんだ。

学円。其は？……

晃。こゝに伝説がある。昔、人と水と戦つて、此の里の滅びやうとした時、越の大徳泰澄が行力で、龍神を其の夜叉ヶ池に封込んだ。龍神の言ふには、人の溺れ、地の沈むを救ふために、自由を奪はるゝは、是非に及ばん。其のかはりに鐘を鋳て、麓に掛けて、昼夜に三度づゝ撞鳴らして、我を驚かせ、其の約束を思出させよ。……我が性は自由を想ふ、自在を欲する、気まゝを望む。ともすれば、誓を忘れて、狭き池の水をして北陸七道に漲らさうとする。我が自由のためには、世の人畜の生命など、ものゝ数ともするのでない。が、約束は違へぬ、誓は破らん——但し其の約束、其の誓を忘れさせまい、思出させやうとするために、鐘を撞く事を怠るな。——山沢、其のために鋳た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、立処に、大雨、大雷、大風とゝもに、夜叉ヶ池から津波が起つて、村も里も水の底に葬つて、龍神は想ふまゝに天地を馳すると……恁う、此の土地で言伝へる。……其のために朝六つ、暮六つ、丑満つ鐘を撞く。……

学円。（乗出でゝ、）面白い。

晃。いや、面白いでは済まない、大切な事です。

学円。如何にも大切な事ぢや。

晃。処で、其の鐘を撞く、鐘撞き男を誰だと思う？……

学円。君か。

晃。僕だよ。即ち萩原晃が其の鐘撞夫なんだよ。

学円。はてな。

晃。こゝに小屋がある……

学円。むゝ。

晃。鐘撞が住む小屋で、一昨年の夏、私が来て、代るまでは、弥太兵衛と云ふ七十九に成る爺様が一人居て、これは五十年以来、如何な一日も欠かす事なく、一昼夜に三度づゝ此の鐘を打つて居た。

山沢、花は人の目を誘ふ、水は人の心を引く。君も夜叉ヶ池を見に来たと云ふ。私が矢張り、池を見やうと、此里へ来た時、暮六つの鐘が鳴つたんだ。弥太兵衛爺に、鐘の所説を聞きながら、夜があけたら池まで案内をさせる約束で、小屋へ泊めて貰つた処。

其の夜、丑満の鐘を撞いて、鐘楼の高い段から下りると、爺は、此の縁前で打倒れた——急病だ。死ぬ苦悩をしながら、死切れないと云つて、悶える——恁うした世間だ、既う以前から、村一統鐘の信心が消えて居る。……爺が死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、掌をめぐらさず、田地田畠、陸は水に成る、沼に成る、淵に成る、幾万、何千の人の生命——其を思ふと死ぬるも死切れぬと、呻吟いて掻く。——虫より細い声だけれども、五十年の明暮を、一生懸命、然うした信仰で鐘楼を守り徹した、骨と皮ばかりの爺が云ふのだ……鐘の自から鳴る如く、僕の耳に響いた。……且は臨終の苦患の可哀さに、安心をさせやうと、——心配をするな親仁、鐘は俺が撞いて遣る、——とはつきり云ふと、世にも嬉しさうに、ニヤニヤと笑つて、拝みながら死んだ。其の時の顔を今に忘れん。

が、まさか、一生、こゝに鐘を撞いて終らうとは思はなかつた。丑満は爺が済ました、明六つの鐘一度ばかり、代つて撞くぐらゐにしか考へなかつた。が、さあ、爺が死ぬ、村のものを呼ばうにも、此の通り隣家に遠い。三度の掟で其の外は、火にも水にも鐘を撞くことは成らないだらう。

学円。其の鳴らして成らないと云ふは、何うした次第ぢやね？

晃。鐘は、高く、此処にあつて――其の影は深く夜叉ヶ池の碧潭に映ると云ふ……撞木を当てゝ鳴る時は、凩にすら、そよりとも動かない、其の池の水が、さら〳〵と波を立てると聞く。元来、龍神を驚かすために打鳴らすのであるから、三度のほかに騒がしては、礼を欠く事に当る……

学円。其の道理ぢや、むゝ。

晃。鐘も鳴らせん……処で、不知案内の村を駆廻つて人を集めた、――サア、弥太兵衛の始末は着いたが、誰も承合つて鐘を撞かうと言はない。第一、しか〳〵であるから、と爺に聞いた伝説を、先祖の遺言のやうに厳に言つて聞かせると、村のものは哄と笑ふ。……若いものは無理もない、老寄どもゝ老寄どもなり、寺の和尚までけろりとして、昔話なら、桃太郎の宝を取つて帰つた方が結構でござる、と言ふ。癪に障つた――勝手にしろと、私も其処から、（と框を指し、）草鞋を穿いて、すた〳〵此の谷を出て帰つたんだ。帰る時、鹿見村のはづれの土橋の袂に、榎の樹の下に立つて悄乎と見送つたのが、（と調子を低く、）あの、婦人だ。

其の日の朝六つの鐘さへ、学校通ひの小児をはじめ指さしをして笑ふ上で、私が撞いた。此の様子では、最早や今日から、暮六の鐘は鳴るまいな！……

もしや、岩抜け、山津波、然うでもない、大暴風雨で、村の滅びる事があつたら、打明けた処……他は構はん、……此の娘の生命もあるまい――待て、二三日、鐘堂を俺が守らう。其の内には、と又四五日、半月一月を経るうちに、早いものよ、足掛け三年、――君に逢ふまで、それさへ忘れた。……又、忘れるために、其の上、年に老朽ちて世を離れた、と自分でも断念のため。……ばかりぢや無い、……雁、燕の行きかへり、軒なり、空な

り、行交ふ目を、一寸は紛らす事もあらうと、昼間は白髪の仮髪を被る。

学円。（黙然として顔を見る。）

晃。（言葉途絶える、）然う顔を見るな、恥入つた。

学円。（少時、打案じ、）すると、あの、……お百合さんぢや、其の人のために、こゝに隠れる気に成つたと云ふのぢや。

晃。……益〻恥入る。

学円。いや、恥づるには及ばん。が、何うぢや、細君を連れて、東京へ出るわけには行かんのかい。

晃。何も三ヶ国と言はん。越前一ヶ国とも言はん。われ〳〵二人が見棄てゝ去つて、此の村と、里と、麓に棲むものゝ生命を何うする。

学円。萩原、（と呼びつゝ、寄り、）で、君は其を信ずるかい。

晃。信ずる、信ずるやうに成つた。萩原晃はいざ知らん、越前国三国ヶ嶽の麓、鹿見村琴弾谷の鐘楼守、百合の夫の二代の弥太兵衛は確に信じる。

学円。（ひたりと洋服の胡座に手をおき）何にも言はん。然う信ぜい。堅く信ぜい。奥方の人を離れた美しさを見るにつけても、天が此の村のために、お百合さんを造り置いて、鐘楼守を、こゝに据ゑられたものかも知れん。君たち二人は二柱の村の神ぢや。就中、お百合さんは女神ぢやな。

百合。（行燈を手に黒髪美しく立出づる、）私、何うしたら可うございませう。

学円。や、此は……

百合。貴客、今ほどは、

学円。扨て、お初に……はゝはゝ、奥さん、

百合。まあ……（と恥らふ）

晃。これ、まあ……ではない、よく御挨拶申しな、兄とおなじ人だ。

百合。（黙つて手をつく。）

学円。はい〳〵。いや、御挨拶は最う済みました。貴女嘘は出ませなんだか。

晃。うつかり嘘なんぞすると、蚊が飛出す。

百合。あれ、沢山おなぶんなさいまし。

晃。そんなにお前、白粉を粧けて。

百合。あんな事ばかりおつしやる（と優しく睨んで顔を隠す。）

学円。何にしろ、お睦じい……はゝはゝ、勝手にお噂をしましたが、何は、お里方、親御、御兄弟は？

晃。山沢、何にもない孤児なんだ。鎮守の八幡の宮の神官の一人娘で、其の神官の父親さんも亡く成つた。叔父があつて、其が今、神官の代理をして居る。……此の前だが、叔父と云ふのは、了見のよくない人でな。

学円。それは〳〵、

晃。姪の此を、附けつ廻はしつ為たと云ふ大難ぶつです。

百合。真個に、たよりのない身体でございます。何にも存じません、不束ものでございますけれど、貴客、何うぞ御ふびんをお掛けなすつて下さいまし。（しんみりと学円に向つて三指して云ふ。）

学円。（引き入れられて、思はず涙ぐむ。）御殊勝ですな。他人のやうには思ひません。

晃。（同じく何となく胸せまる、涙を払つて、）さあ〳〵、親類と云ふお言葉なんだ。遠慮のない処、何にも要らん。御吹聴の鳴焼で一杯つけな。此からゆつくり話すんだ。山沢、野菜は食はしたいぜ、そりや、甘いぞ。

学円。奥方、お立ちなさるな。ト其処でぢやな、萩原。私は志した通り、此から夜を掛けて夜叉ヶ池を見に行く気ぢや。種々不思議な話を聞いたら、尚ほ一層見たく成つた。御飯はお手料理で御馳走に成らうが、お盃には及ばん、第一、知つてる通り、一滴も飲めやせん。

晃。成程、然うか、夜叉ヶ池を見に来たんだ。……明日にしては、と云ふんだけれども、道は一里余り、が、上りが嶮しい。此の暑さでは夜が可い。しかし、四五日は帰さんから、明日の晩にしてくれないかい。

学円。いや、学校がある。此でも学生の方ではないから勝手に休めん。第一、遊び過ぎて、既う切詰めぢや。

晃。其は困つた、学校は？……前刻、落着く前は京都だと云つたやうだな。

学円。むゝ、去年から大宮人に成つた。みやづかへの情なさぢや。何しろ、急ぐ。

晃。了つた、では案内かたゞ一緒に行く……

学円。君も。

晃。……直ぐに出掛けやう。

学円。それだと、奥方に済まんぞ。

晃。何を詰らない。

百合。否……（と云ひしがしほ〳〵と、）貴方、直ぐにとおつしやつて、……お支度は……

晃。土橋の煮染屋で竹の皮づゝみと遣らかす、其の方が早手廻だ。鰊の煮びたし、焼どうふ、可からう、山沢。

学円。結構ぢや。

晃。事が決れば早いが可い。源左衛門は草履で可、最明寺どのは、お草鞋、お草鞋。

学円。やあ、おもしろい。奥さん、いづれ帰途には寄せて頂く。私は味噌汁が大好きです。小菜を入れて食べさして発せて下さい。時に、帰途は何時に成らう……

晃。さあ、夜が短い。明方に成らうも知れん。

学円。明けがた……は可いが、（と草鞋を穿きながら、）待て待て、一緒に気軽に飛出して、今夜、丑満つの鐘は何うするのぢや。

晃。百合が心得て居る。先代弥太兵衛と違ふ、仙人ではない、生身の人間。病気もする、百合が時々代るんだよ。

学円。では、池のあたりで聞きませう。奥方しつかり願ひます。

百合。はい、内をお忘れなさいませんやうに、私は一生懸命に、（と涙声にて云ふ。）

晃。……おい、あの、弥太兵衛が譲りの、お家の重宝と云ふ瓢箪を出したり、酒を買う。——其から鎌を貸しな、滅多に人の通はぬ処、路はあつても熊笹ぐらゐは切らざあ成るまい。……早くおし。

百合。はい、はい。

学円。やあ、どぎ〳〵と鋭いな。（と鎌を見る。）

晃。月影に……（空へかざす）尚ほ光るんだ。此でも鎌を研ぐことを覚えたぜ。——此方だ、此方だ、（と先

へ立。）

百合。お気をつけ遊ばせよ。（とうるみ声にて、送り出づる時、可愛き人形袖にあり。）

晃。何だい、こんなもの、（見返る。）

百合。太郎が一寸お見送り。（と袖でしめつゝ、）小父ちゃんもお早くお帰りなさいまし、坊やが寂しうございます。（と云ひながら、学円の顔をみまもり、小家の内を指し、うつむいてほろりとする。）

学円。（庇ふ状に手を挙げて、又涙ぐみ、）御道理ぢや、が、大丈夫、夢にも、そんな事が、貴女、（と云つて晃に向きかへ、）私に逢ふて、里心が出て、君が此なり帰るまいか、と云ふ御心配ぢや。

百合。（きまりわるげに、つと背向になる。）

晃。あゝ、其で先刻から……馬鹿、嬰児だな。

学円。何かい、一寸出掛にキスなどせんでも可いかい。

晃。旦那方ぢやあるまいし、鐘撞弥太兵衛でがんすての。（と両人連立ち行く。）

百合。（熟と少時。）まさかと思ふけれど、ねえ、坊や、大丈夫お帰んなさるわねえ。おゝ〳〵目ン目を眠つて、頷いて、まあ、可愛い、（と頬摺りし、）坊やは、お乳をおあがりよ、母さんは一人ではお夕飯も欲くない。早く片附けてお留守をしませう。一人だと見て取ると、村の人が煩いから、月は可、灯を消して戸をしめて。――（と框にづツと雨戸を閉める。閉め果てると、戸の鍵がガチリと下りる。やがて、納戸の燈、はつと消ゆ。）

へ出る化ものゝ数々は、一ツ目、見越、河太郎、獺、海坊主、天守にをさかべ、化猫、赤手拭、篠田に葛の葉、野干平、古狸の腹鼓、ボコポンポコポン、コリヤ、ポンポコポン、笛に雨を呼び、酒買小僧、鉄漿着女のけた

〳〵笑、里の男はのつぺらぼう。

と唄――

与十。（竹の小笠を仰向けに、鯉を一尾、嬉しさうな顔して見て、ニヤニヤと笑つて出づ。）大い事をしたぞ。へい、雪さ豊年の兆だちゆう、旱は魚の当りだんべい。大沼小沼が干た故か、ぢよんぢよろ水に、びちゃ〳〵と泳いだ処を、ちよろりと、掬つた。……（鯉刎ねる。）わあ、銀の鱗だ。づゝんと重い。四貫目あるべい。村長様が、大囲炉裡の自在竹に掛つた瀧登りより、えツと大え。こりや己がで食はうより、村会議員の髯どのに売るべいわさ。やれ、鯉。髯どのに身売をしろちゃ。値に成れ、値に成れ。（鯉刎ねる。）ふあ、銀の鱗だ、金が光る――光るてえば、鱗てえば、こゝな、（と小屋を見て、）鐘撞先生が打つてしめた、神官様の嬢様さあ、御宮の住居にござつた時分は、背中に八枚鱗が生へた蛇体だと云つけえな……そんではい、夜さり、夜ばひものが、寝床を覗くと、何時でもへい、白蛇の長いのが、嬢様のめぐり廻つて、のたくるちつて、現にはい、目のくり球廻らかいて火を吹いた奴さへあつけえ。……

鐘撞先生には何事もねえと見えるだ。まんだ、丈夫に活きてござつて、執殺されもさつしやらねえ。見ろやい、取つても着けねえ処に、銀の鱗さ、ぴか〳〵と月に光るちツて、汝がを、（と鯉をじろ〳〵、）ばけものか蛇体と思ふて、手を出さずば、うまい酒にもありつけぬ処だつたちゆうものだ。――嬢様が手本だよ。はつてな、今時分、真暗だ。舐殺されはしねえだかん、待ちろ。（と抜足で寄つて、小屋の戸の隙間を覗く。）

蟹五郎。（朱顔、蓬なる赤毛頭、緋の衣したる山伏の扮装。山牛蒡の葉にて捲いたる煙草を、シヤと横啣へに、ぱつと煙を噴きながら、両腕を頭上に突張り、ト鋏を極込み、蹲んで横這ひに、づかり〳〵と歩行き寄つて、与

十の隙見する向脛を、かつきと挟んで引く。）

与十。痛え。（と叫んで、）わつ、（と反る時、鯉ぐるみ竹の小笠を夕顔の蔭に投ぐ。）ひやあ、藪沢の大蟹だ。人殺し！（と怪し飛んで遁ぐ。――蟹五郎すかり〳〵と横に追ふ。）

鯉七。（鯉の精、夕顔の蔭より、する〳〵顕はる。黒白鱗の帷子、同じ鱗形の裁着け、鰭の如きひら〳〵足袋。件の竹の小笠に面を蔽ひながら来り、はたと其の小笠を擲つ。顔白く、口のまはり、べたりと髯黒し。蟹此を見て引返す。）

鯉七。（ぼく〳〵と口を開けて、はつと溜息し、）あゝ、人間が旱の切なさを今にして思当つた。某が水離れしたと同然と見える。……おゝ、大蟹、今ほどはお助け嬉しい、難有かつたぞ。

蟹五郎。水心、魚心だ、其の礼に及ばうかい。又、だが、瀧登りもするものが、何ぢやとて、笠の台に乗せられた。

鯉七。里へ出る近道してな、無理な流を抜けたと思へ。石に鰭が躓いて、膚捌の成らぬ処を、ばツさりと食つた奴よ。

蟹五郎。此奴にか。（と落ちたる笠を挟んで圧へる。）

鯉七。鬼若丸以来と云ふ、難儀に逢はせた。百姓めが、汝。（と笠を蹈む。）

笠。己ぢやねえ、己ぢやねえ。（と、声ばかりして蔭にて叫ぶ。）

鯉七。はあ、いかさま汝の行為でもあるまい。助けて遣らう――それや行け、やい、稲が実つたら案山子に成れ！（と放す。しかけにて、竹の小笠はた〳〵と煽つて遁げる。）はゝはゝ飛ぶわ〳〵、南瓜畠へ潜つて候。

蟹五郎。人間の首が飛んだ状だな、気味助、気味助。かツかツかツ（と笑ひ）鯉七、此から何処へ行く。

鯉七。むう、些と里方へ用がある。処で瀧を下つて来た。何が、此の頃の旱で、やれ雨が欲い、それ水をくれろと百姓どもが、姫様のお住居、夜叉ヶ池のほとりへ五月蠅きほどに集つて来せる。それはまだ可い。が、何の禁厭か知れぬまで、鉄釘、鉄火箸、錆刀や、破鍋の尻まで持込むわ。まだしもよ。お供物だと血迷つての、犬の首、猫の頭、目を剝き、髯を動かし、舌をべら〳〵吐く奴を供へるわ。胡瓜ならば日野川の河童が嚙らう、以つての外な、汚穢うて〳〵、お腰元たちが掃除をするに手が掛つて迷惑だ。

処で、姫様のお乳母どの、湯尾峠の万年姥が、某へ内意――降らぬ雨なら降るまでは降らぬ、向後汚いものなど撒散らすに於ては其の分に置かぬ――と里へ出て触れいとある。ためにの、此の鰭を煩はす、厄介な人間どもよ。

蟹五郎。其の事かい、御苦労、御苦労。処で、大池の姫様には、なか〳〵雨を下さる思召は当分ないかい。

鯉七。分らんの。旱は何も、姫様御存じの事ではない。第一、其許なども知る通りよ。姫様は、それ、御縁者白山の剣ヶ峯千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、恋し、恋しと、其ばかり思詰めてましますもの、人間の旱なんぞ構つて居る間があるものかツてい。

蟹五郎。神通広大――俺をはじめ考へるぞ。然まで思悩んでおゐでなさらず、両袖で飜然と飛んで、疾く剣ヶ峯へおいでなさるが可いではないかい。

鯉七。其処だの、姫様が座をお移し遊ばすと、それ、立処に津波で、此の村里は、人も、馬も、水の底へ沈んで了う……

蟹五郎。何が、何が、第一俺が住居も広う成る……村が泥沼に成るを、何が遠慮だ。勧めろ、勧めろ。

鯉七。忘れたか、鐘が此処にある。……御先祖以来、人間との堅い約束。夜昼三度、打つ鐘を、彼奴等が忘れぬ中は、村は滅びぬ天地の誓盟。姫様にも随意に成らぬ。然ればこそ、御鬱懐。其の御ふびんさ、おいとしさを忘れたの。

蟹五郎。南無三宝、堂の下で誓を忘れて、鐘の影を蹈まうとした。が、山も田畝も晃々とした月夜だ。まだ〳〵しめつた灰も降らぬと成ると、俺も沢を出て、山の池、御殿の長屋へ行かずばなるまい。同道を頼むぞ、鯉。

鯉七。むゝ、其の儀は、ぱくりと合点んだ。かはりにはの、道が寂しい……里へは、貴公同道せい。

蟹五郎。帰途はお池へ伴侶だ。

鯉七。月の暇を、唄うて行かうよ。

蟹五郎。何と唄う？

鯉七。‖山を川にせう‖と唄はうよ。

蟹五郎。面白い。（と同音に、鯉はふら〳〵と袖を動かし、蟹は、ぱツぱツ〳〵煙を吹いて、‖山を川にせう、山を川にせう‖と同音に唄ひ行く。行掛けて淀み、行途を望む。）

鯉七。待て、見馴れぬものが、何やら田の畝を伝ふて来る。

蟹五郎。かツかツ、怪しいものだ。小蔭れて様子を見んかい。（両個、姿を隠す。）

百合。（人形を抱き、媚かしき風情にて戸を開き戸外に出づ。）夜の長い事、長い事……何の夏が明易からう。坊やも寝られないねえ、——お月様幾つ、お十三、七つ——今も誰やら唄うて通つたのをお聞きかい、——山を

川にしよ――あゝ、此の頃では村の人が、山を川にもしたがらう、お気の毒だわねえ。……まあ、良い月夜、峰の草も見えるやうな。晃さん、お客様の影も、あの、松のあたりに見えやうも知れないから、鐘堂へ上りませうね。……ひよつとかして、袖でも触つて鳴ると悪いね、田畝の広場へ出て見やうよ、（と小屋のうらに廻つて入る。）

鯰入。（花道より、濃い鼠すかしの頭巾、面一面に黒し。白き二根の髯、鼻下より左右にわかれて長く裾まで垂る。墨染の法衣を絡ひ、鰭の形したる鼠の足袋。一本の蘆を杖つき、片手に緋総結びたる、美しき文箱を捧げて、ふら〳〵と出て来る。）遥々と参つた……以つての外の旱魃なれば、思ふたより道中難儀ぢや。（と遥かに仰いで、）はあ、争はれぬ、峰の空に水気が立つ。嬉しや、……夜叉ヶ池は、彼処に近い。（と辿り寄る。鯉、蟹、前途に立顕はる。）

鯉七。誰だ。此へ来たは何ものだ。

蟹五郎。お山の池の一の関、藪沢の関守が控へた。名のつて通れ。

鯰入。（杖を袖にまき熟と視て、）扨は縁のない衆生でないの。……此は、北陸道無双の霊山、白山、剣ヶ峰千蛇ヶ池の御公達より、当国、三国ヶ嶽夜叉ヶ池の姫君へ、文づかひに参るものぢや。

鯉七。おゝ、聞及んだ黒和尚。

蟹五郎。鯰入は御坊かい。

鯰入。此は、いづれも姫君のお身内な。夜叉ヶ池の御眷属か。よい所で出会ひました、案内を頼みませう。

蟹五郎。お使ひ御苦労です。

鯉七。些と申つかつた事があつて、里へ参る路ではあれども、若君のお使、何は措いてもお供せう。姫様、お喜びの顔が目に見える、われらもお庇で面目を施します、さあ、御坊、……

蟹五郎。さあ、御坊。

鯰入。（ふと、くな〳〵と成つて得進まず、）しばらく。先づ、しばらく、……

鯉七。御坊、お草臥れなら、手を取りませう。

蟹五郎。何と腰を押さうかい。

鯰入。いや〳〵疲れはしませぬ。尾鰭はのら〳〵と刎ねるなれども、こゝに、ふと、世にも気懸りが出来たぢやまで。

鯉七。気懸りとは？　御坊。

鯰入。此処まで辿つて、いざ、お池へ参ると思へば、急に此の文箱が、身にこたへて、づんと重う成つた其の事ぢや。

鯉七。恋の重荷と言ひますの。お心入れの御状なれば、池に近く、御双方お気が通つて、自然と文箱に籠りましたか。

蟹五郎。又かい。姫様から、御坊へお引出ものなさる。……あの、黄金白銀、米、粟の湧こぼれる、石臼の重量が響きますかい。

鯰入。（悄然として、）いや、私が身に応へた処は、こりや虫が知らすと見えました。御褒美に遣はさるゝ石臼なれば可けれども、‖此の坊主を輪切りにして、スツポン煮を賞翫あれ、姫、お昼寝の御目覚しに‖と記し

てあらうも計られぬ。わあ、可恐しや。（とわな〳〵と蘆の杖とゝもにふるひ出す。）

鯉七。何で又、其のやうな飛んだ事を？　御坊。……

鯰入。いや〳〵、急に文箱の重いにつけて、ふと思ひ出いた私が身の罪科がござる。扨て、言ひ兼ねましたが打開けて恥を申さう、（と頸をすくめて、頭を撫で、）……近頃、此方衆の前ながら、館、剣ヶ峰千蛇ヶ池へ――熊に乗つて、黒髪を洗ひに来た山女の年増がござつた。裸身の色の白さに、つひ、とろ〳〵と成つて、面目なや、ぬらり、くらりと鰭を滑らかいてまつはりましたが、フトお目触りと成つて、われら若君、以つての外の御機嫌ぢや。――処を此の度の文づかひ、泥に潜つた閉門中、唯おほせつけの嬉しさに、うか〳〵と出て参つたが、心着けば、早や鰭の下がくすぼつたい。（と又震ふ。）

蟹五郎。かツ、かツ、かツ、（と笑ひ、）御坊、おまめです。あやかりたい。

鯰入。笑はれますか、情ない。生命とまでは無うても、鰭、尾を放て、髯を抜け、とほどには、おふみに遊ばされたに相違はござるまい。……此は一期ぢや、何とせう。（と寂しく泣く。鯉、蟹、此を見て囁き、頷く。）

鯉七。いや、御坊、無い事とも言はれませぬ。昔も近江街道を通る馬士が、橋の上に立つた見も知らぬ婦から、十里前の一里塚の松の下の婦へ、と手紙を一通ことづかりし事あり。途中気懸りに成つて、密と其の封じ目を切つて見たれば、――妹御へ、一、此の馬士の腸一組参らせ候――としたゝめられた。何も知らずに渡さうものなら、腹を割かるゝ処であつたの。

鯰入。はあ、（と撞と尻持つく。）

蟹五郎。お笑止だ。かツかツかツ。

鯉七。幸ひ、五郎が鋏を持ちます……密と封を切つて、御覧が可からう。

鯰入。やあ、何と、……其を頼みたいばツかりに恥を曝した世迷言ぢや。……嬉しや、大目に見て下さるかのう。

蟹五郎。最も、最も、

鯉七。又……（と声を密めて、）恋し床しのお文なれば、そりや、われ〳〵どもが尚ほ見たい。

鯰入。（わなゝきながら、文箱を押頂き、紐を解く、鯉、蟹犇と寄る。蓋を放つて斉しく見る。）

鯰入。やあ！

鯉七。えゝ〳〵！

蟹五郎。やあ〳〵やあ！

鯰入。文箱の中は水ばかりよ。（と云ふ時、さつと、清き水流れ溢る。）

鯉七。あれ〳〵あれ、姫様が。（はつと鯰入とゝもに泳ぐ形で腹ばひに成る。蟹は跪いて手を支ゆ。）——糶上にて——

夜叉ヶ池の白雪姫。雪なす羅、水色の地に紅の焔を染めたる襲衣、黒漆に銀泥鱗の帯。下締なし、裳をすらりと、黒髪長く、丈に余る。銀の靴をはき、帯腰に玉の如く光輝く鉄杖をはさみ持てり。両手にひろげし玉章を颯と繰落して、地摺に取る。

右に、湯尾峠の万年姥、針の如き白髪、朽葉色の帷子、赤前垂。

左に、腰元、木の芽峠の奥山椿、萠黄の紋付、文金の高髷に緋の乙女椿の花を挿す。両方に手を支いて附添

ふ。

十五夜の月出づ。

白雪。ふみを読むのに、月の明は、もどかしいな。

姥。御前様、お身体の光りで御覧ずるが可うございます。

白雪。（下襲を引いて袖口の炎を翳し、やがて読果てゝ恍惚と成る。）

椿。姫様。

姥。もし、御前様。

白雪。可懐しい、優しい、嬉しい、お床しい音信を聞いた……姥、私は参るよ。

老女。たま〳〵麓へお歩行が、

椿。最うお帰り遊ばしますか。

白雪。何処へ？……（と聞返す。）

老女。お住居へ、

白雪。何？

老女。夜叉ヶ池へでございませう。

白雪。あれ、お前は何を言ふ？……私の行くのは剣ヶ峰だよ。

一同。剣ヶ峰へとおつしやりまするとの？

白雪。聞かずと大事ないものを——千蛇ヶ池とは知れた事——此おふみの許へさ。（と巻戻して懐中に納めて

抱く。）

姥。（居直り、）又……我儘を仰せられます、お前様、こゝに鐘がございます。

白雪。む、（と眦をあげて、鐘楼を屹と見る。）

姥。お忘れはなさりますまい。山ながら、川ながら、御前様が、御座をお移しなさりますれば、幾万、何千の生類の生命を絶たねば成りませぬ。剣ヶ峰千蛇ヶ池の、あの御方様とても同じ事、此へお運びとなりますと、白山谷は湖に成りますゆゑ、其のために彼方からも御越の議は叶ひませぬ。――姥はじめ胸を痛めます。……おいとしい事なれども、是非ない事にございます。

白雪。そんな、理窟を云つて……姥、お前は人間の味方かい。

姥。へゝ、（嘲笑ひ、）尾のない猿ども、誰がかばひだていたしませう。……憎ければとて、浅間しければとて、気障なればとて、たとひ仇敵なればと申して、約束はかへられませぬ、誓を破つては相成りませぬ。

白雪。誓盟は誰がしたえ。

姥。御先祖代々、近くは、両、親御様まで、第一お前様に御遺言ではございませぬか。

白雪。知つて居ます。（とつんとひぞる。）

姥。もし、お前様、其の浅間しい人間でさへ、約束を堅く守つて、五百年、七百年、盟約を忘れぬではございませぬか。盟約を忘れませねばこそ、朝六つ暮六つ丑満つと、三度の鐘を絶しませぬ。此の鐘の鳴りますうちは、村里を水の底には沈められぬのでございます。

白雪。えゝ、怨めしい……此の鐘さへなかつたら、（と熟と視て、すらりと立直り、）衆に此処へ来いとお言ひ。

椿。（立つて一方を呼ぶ）召します。姫様が召しますよ。

鯉七。（立上りて一方を、）やあ、いづれも早く。（と呼ぶ。眷属ばら〳〵と左右に居流る。一同獲ものを持てり。扮装おもひ〳〵、鎧を着たるもあり、髑髏を頭に頂くもあり、百鬼夜行の体なるべし。）

虎杖。虎杖入道。

鯖江。鯖江ノ太郎、

鯖波。鯖波ノ次郎、

此の両個　兄弟のもの。（と同音に名告る。）

塚。十三塚の骨寄鬼。

蟹五郎。藪沢のお関守は既に先刻より。

椿。其のほか、夥多の道陸神たち、こだますだま、魑魅、罔魎。

影法師。（おなじ姿のもの夥多あり。目も鼻もなく、あたまから唯灰色の布を被る。）影法師も交りまして。（と此の名のる時ちら〳〵と遠近に陰火燃ゆ。此よりして明滅す。）

鯉七。身内の面々、一同参り合はせました。

鯰入。憚りながら法師も此に……

白雪。おゝ、遠い路を、太儀。すぐお返事を上げませうね、其のために皆を呼びましたよ。

姥。や、彼方へお返事につきまして、いづれもを召しました？——仰せつけられまする儀は？

白雪。姥、何う思ふても私は行く。剣ヶ峯へ行かねばならぬ。鐘さへなくば盟約もあるまい……皆が、あの鐘、

取つて落して、微塵になるまで砕いてお了ひ。

椿。えゝ〳〵仰せなればと云ふて、いづれも必ずお動きあるな。（眼を光らし、姫を瞻めて、）まだ其のやうなわやくをおつしやる……身うちの衆をお召出しお言葉がござりましては、わやくが、わやくに成りませぬ。天の神々、きこえも可恐ぢや……数の人間の生命を断つ事、屹とおたしなみなさりませい。

白雪。人の生命の何う成らうと、其を私が知る事か！……恋には我身の生命も要らぬ。……姥、堪忍して行かしておくれ。

姥。あゝ、お最惜い。が、成りますまい。……最う多年御辛抱なさりますと、三十年、五十年とは申しますまい。今の世は仏の末法、聖の澆季、盟誓も約束も最早や忘れて居りまする。漸ツと信仰を繋ぎますのも、あの鐘を、鳥の啄いた蔓葛で釣しましたやうなもの、鎖も絆も切れますのは、まのあたりでござります。其までお堪へなさりまし。

白雪。あんな気の長い事ばかり。あこがれ慕ふ心には、冥途の関を据ゑたとて、夜のあくるのも待たれうか。可、可、衆が肯かずば私が自分で、（と気が入る。）

椿。あれ、お姫様。

姥。此は何となされます……取棄てゝ大事ない鐘なら、御前様のお手は待たぬ……身内に仰せまでもない。何、唐銅の八千貫、恁う痩せさらぼへた姥が腕でも、指で挟んで棄てませうが、重いは義理でござりまするもの。

白雪。義理や掟は、人間の勝手づく、我と我が身をいましめの縄よ。……鬼、畜生、夜叉、悪鬼、毒蛇と言はるゝ私が身に、袖とて、褄とて、恋路を塞いで、遮る雲の一重もない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束な

り、盟誓なり、それは都合で遊ばした。人間とても年が経てば、ないがしろにする約束を、一呼吸早く私が破るに、何に憚る事がある！　あゝ、恋しい人のふみを抱いて、私は心も脳乱した、姥、許して！

姥。成程、お気が乱れましたな。朝六つ暮六つ唯だ一度、今宵此の丑満一つも、人間が怠れば、其の時こそは瞬く間も待ちませぬ。御前様を、此の姥がおぶひ申して、お靴に雲もつけますまい。人は死なうと、溺れやうと、峰は崩れよ、麓は埋れよ、剣ヶ峰まで、唯一飛び。……此の鐘を撞く間に、盟誓をお破り遊ばすと、諸神、諸仏が即座のお祟り、それを何となされます！

鯉七。当国には板取、帰、九頭龍の流を合はせて日野川の大河。

蟹五郎。美濃の国には名だゝる揖斐川。

姥。二個の川の御支配遊ばす。

椿。百万石のお姫様。

姥。我まゝは……

一同。相成りませぬ。

姥。お身体。

一同。大事にござります。

白雪。えゝ、煩いな、お前たち。義理も仁義も心得て、長生したくば勝手におし。……生命のために恋は棄てない。お退き、お退き、（一同、入乱れて、遮り留むるを、振払ひ、掻い潜つて、果は真中に取籠められる。）

白雪。お退きといふに、え……（とじれて、鉄杖を抜けば、白銀の色、月に輝き、一同は、はツと退く。姫、

する〳〵と寄り、颯と石段を駆上り、柱に縋つて屹と鐘を、）諸神、諸仏は知らぬ事、天の御罰を蒙つても、白雪の身よ、朝日影に、情の水に溶くるは嬉しい。五体は粉に砕けやうと、八裂にされやうと、恋しい人を血に染めて、燃えあこがるゝ魂は、幽な蛍の光と成つても、剣ヶ峰へ飛ばいで置かうか。（と晃然とかざす鉄杖輝く……時に、月夜を遥かに、唄の声す。）＝ねんねんよ、おころりよ、ねんねの守は何処へいた、山を越えて里へ行た、里の土産に何貰うた、でん〳〵太鼓に笙の笛＝

白雪。（じつと聞いて、聞惚れて、火焔の袂たよ〳〵と成る。やがて石段の下を呼んで、）姥、姥、あの、声は？……。

姥。社の百合でござります。

白雪。おゝ、美しいお百合さんか、何をして居るのだらうね。

姥。恋人の晃の留守に、人形を抱きまして、心遣りに、子守唄をうたひまする。

白雪。恋しい人と分れて居る時、うたを唄へば紛れるものかえ。

姥。おほせの通りでござります。

椿。姫様、遊ばして御覧じませぬか。

白雪。思ひせまつて、つひ忘れた。……私が此の村を沈めたら、美しい人の生命もあるまい。鐘を撞けば仇だけれども、（と石段を静かに下りつゝ、）此家の二人は、嫉しいが羨しい。姥、おとなしうしてあやからうな。

姥。（はら〳〵と落涙して、）お嬉しう存じまする。

白雪。（椿に、）お前も唄うかい。

椿。はい、いろ〳〵のを存じて居ります。

鯉七。いや、お腰元衆。いろ〳〵知つたは結構だが、近ごろはやる、──池の鯉よ、緋鯉よ、早く出て麩を食へ──なぞと、馬鹿にしたやうなのはお唄ひなさるな、失礼千万、御機嫌を損じやう。

椿。まあ……お前さんが、身勝手な。

一同。（どつと笑ふ。）

白雪。人形抱いて、私も唄はう……剣ヶ峰のおつかひ。

鯰入。はあ、はあ、はッ。

白雪。お返事を上げやう……一緒に──椿や、文箱をお預り。──衆も御苦労であつた。（一同敬ふ。）──でんでん太鼓に笙の笛、起上り小法師に風車──（と唄うを聞きつゝ、左右に分れて、おひ〳〵に一同入る。陰火全く消ゆ。）

月あかりのみ。遠く犬吠え、近く五位鷺啼く。

お百合、いきを切つて、すた〳〵、褄もはら〳〵と遁げ帰り、小家の内に駆入り、隠る。あとより、村長畑上嘉伝次、村の有志権藤管八、小学校教員斎田初雄、村のものともに追掛け出づ。村長と、有志は、赤十字の徽章を帯びたり。

一方より、神官代理鹿見宅膳、小力士、小烏風呂助、と前後に村のもの五人ばかり、烏帽子、素袍、雑式、仕丁の扮装にて、一頭の真黒き大牛を率ゐて出づ。牛の手綱は、小力士これを取る。

村一。内へ隠れたど、内へ隠れたど。

村二。真暗だえ。

初雄。灯を消したつて夏の虫だに。

管八。踏込んで引摺出せ。（村のもの四五人、ばら〳〵と踊込む。内に、あれ〳〵と言ふ声す。雨戸ばら〳〵とはづるゝ、真中に屹と成り――左右を支へて。）

百合。何をおしだ、人の内へ。

管八。人の内も我が内もあるものかい。鹿見一郡六ヶ村。

初雄。焼土に成らう、野原に焦げやうと云ふ場合であるです。

宅膳。（づゝと出で、）こりや、お百合、見苦しい、何をざはつく。唯今も、途中で言聞かした通りぢや。貴様に白羽の矢が立つたで、否応はないわ。六ヶ村の水切れぢや、米ならば五万石、八千人のために、雨乞の犠牲に成りませう！　小児のうちから知つても居らうが、絶体絶命の旱の時には、村第一の美女を取つて裸体に剝ぎ……

百合。えゝ、（と震へる。）

宅膳。黒牛の脊に、鞍置かず、荒縄に縛める。や、最も神妙に覚悟して乗つて行けば縛るには及ばんてさ。……すなはち、草を分けて山の腹に引上せ、夜叉ヶ池の龍神に、此の犠牲を奉るぢや。が、生命は取らぬ。然るかはり、脊に裸身の美女を乗せたまゝ、池のほとりで牛を屠つて、角ある頭と、尾を添へて、此を供へる。……肉は取つて、村一同冷酒を飲んで啖へば、一天忽ち墨を流して、三日の雨が降灌ぐ、田も畠も蘇活るとあるわい。昔から一度も其の験のない事はない。お百合、それだけの事ぢや、我慢して、村長閣下の前につけても御奉公

申上げい。さあ、立たう。立ちませう。

百合。叔父さん、何にも申しません、何うぞ、あの、晃さん、旦那様のお帰りまでお待ちなすつて下さいまし。もし、皆さん、堪忍して下さいまし。……手を合はせて拝みます。そ、そんな事が、まあ、私に……。

管八。何だとう？

初雄。貴女、お百合さん、何ですか。

百合。叔父さん、後生でございます……晃さんの帰りますまで。

宅膳。又しても旦那様ぢや。晃、晃と呆れた奴めが。これ、潮の満干、月の数……今日の今夜の丑満は過されぬ、立ちませう、〳〵。

管八。言ふことを肯かんと縛り上げるぞ。

嘉伝次。村、郡のためぢや、是非がない。これ、はい、気の毒なものぢやわい。

管八。お神官、こりやいかんでえ？

宅膳。引立てゝ可うござる。

管八。来い、それ、（と村のもの取込むる、百合遁げ迷ふ。）

風呂助。埒あかんのう。私にまかせたが可うござんす。

（とのさばり掛り、手もなく抱すくめてつかみ行く、仕丁手伝ひ、牛の背に仰けざまに置く。）

百合。あゝれ、（と悶ゆる。胴にまはし、ぐる〳〵と縄を捲く。お百合背を捻ぢて面を伏す、黒髪颯と乱れて長く牛の蹄に落つ。）

嘉伝次。宅膳どん、こりや、きものを着て居て可いかい。

宅膳。はあ、いづれ、社の森へ参つて、式の如く本支度に及びまする。社務所には、既に、近頃此のあたりの大地主に成られましたる代議士閣下をはじめ、お歴々衆、村民一同の事をお憂慮なされて、雨乞の模様を御見物にお揃ひでござりますでな。

嘉伝次。其の事ぢやつけね。

初雄。皆、急ぐです。

管八。諸君努力せよかね、はゝゝゝ。（一同、どや〳〵と行きかゝる。）

晃。（衝と来り、前途に立つて、屹と見るより、仕丁を左右へ払ひのけ、はた、と睨んで、牛の鼻頭を取つて向け、手縄を、ぐい、と締めて、づか〳〵我家の前。腰なる鎌を抜くや否や、無言のまゝ、お百合のいましめの縄を弗ツと切る。）

百合。（一目見て）おゝ晃さん、（ところげ落ち、晃のうしろに身をかくして、帯の腰に取縋り、）旦那様、いゝ処へ。貴下。何うして、まあ、よく、まあ、早う帰つて下さいました、ねえ。

晃。（百合を背後に庇ひ、利鎌を逆手に、大勢を睨めつけながら、落着いたる声にて、）あゝ、夜叉ヶ池へ、——山路、三の一ばかり上つた処で、峯裏幽に、遠く池ある処と思ふあたりで、小児をあやす、守唄の声が聞こえた。……唄の声が、此の月に、白玉の露を繋いで、蓬の草も綾を織つて、目に蒼く映つたと思へ。……侶伴が非常に感に打たれた。——山沢には三歳に成る小児がある。……里心が出て堪へられん。月の夜路に深山路かけて、知らない他国に徜徉ふことは、又、来る年の首途にしやう。帰り風が颯と吹く、と身体も寒く成つたと云ふ。

私もしきりに胸騒ぎがする。すぐに引返して帰つたんだよ。（と穏に、お百合に向つて言ひ果てる、とすツと立つて、瓢を逆に、月を仰いで、ごツと飲む。）

百合。（のび上つて、晃が紐を押へ頸に掛けたる小笠を取り、瓢を引く。晃はなすを、受け取つて框におく。すぐに、鎌を取らうとする。晃、手を振つて放さず、お百合、しかと其の晃の鎌を持つ手に縋り居る。）

晃。帰れ、君たちア何をして居る。

初雄。更めて断るですがね、君、お気の毒だけれど、最う、村を立去つてくれ給へ。

晃。俺を此の村に置かんと云ふのか。

初雄。然りです。——御承知でもあるでしやう、又御承知がなければ、恐らくばかと言はんけりや成らんですが、此の旱です、旱魃です。……一滴の雨と雖も千金むしろ万金の場合にですな。君が迷信さるゝ処の其の鐘は、一度でも鳴らさない時は即ち其の、村が湖に成ると云ふです。湖に成る……結構ですな。望む処である、です、から、して、からに、其の即ちです。今夜からしてお撞きなさらない事にしたいのです。鐘を撞かん事に成つて見る日に成つて見ると、いたしてから、其の、鐘を撞くための君はですな、名は権助と云ふか何うかは分らんですが、えゝん！

村二三。ひや〳〵。（と云ふ。）

村四五。撞木野郎、丸太棒、（と怒鳴る。）

初雄。えへん、君は此の村に於て、肥料の糟にも成らない、更に、敢て、而して其の、聊も用のない人です。故にです、故にですな、我々一統が、鐘を、お撞きに成るのを、お断りをしますと同時に、村をお立ち去りの事

を宣告するのです。

村二三。然うだ、然うだとも。

晃。望む処だ。……鐘を守るとも守るまいとも勝手にしろと言はるゝから、俺には約束がある……義に寄て守つて居たんだ。鳴らすなと言ふに、誰がすき好んで鐘を撞くか。勿論、即時に此処を去る。

村四五。出て行け、出て行け。

晃。お百合行かう。――（其のいそ〳〵身繕ひするを見て、）支度が要るか、跣足で来い。茨の路は負つて通る。（と手を引く。お百合其の袖に庇はれて、大勢の前をすた〳〵と行く。――忍んで様子を見たる、学円、此の時密と其の姿を顕はす。）

管八。（悪く沈んだ声して、）おい〳〵、おい待て。

晃。（構はずつか〳〵と行く。）

管八。待て、こら！

晃。何だ。（とつゝと返す。）

管八。貴様、村のものは置いて行け。

晃。塵ひとつ葉も持つちや行かんよ。

管八。其の婦は村のものだ。一緒に連れて行く事は出来ないのだ。

晃。いや、此の百合は俺の家内だ。

嘉伝次。黙りなさい。村のものぢやわい。

晃。何処のものでも差支へん、百合は来たいから一緒に来る……留りたければ留るんだ。それ見ろ、萩原に縋つて離れやせん。（微笑して、）置いて行けば百合は死なう……人は心のまゝに活きねばならない。百姓どもに分るものか。さあ、行かう。

宅膳。（のしと進み、）これ〳〵若いもの、無分別は為に成らんぞ。……私が姪は、たゞ此の村のものばかりでない、一郡六ヶ村八千の人の生命ぢや、雨乞の犠牲にしてな。それぢやに、……其の犠牲の女を連れて行くのは、八千の人の生命を、お主が奪取つて行くも同然。百合を置いて行かん事には、此処は一足も通されんわ。百合は八千の人の生命ぢや。が。……さあ、何うぢやい。

学円。しばらく、（と声を掛け、お百合を中に晃と立並ぶ。）其の返答は、萩原からは為にくからう。代つて私が言ふ。――如何にも、お百合さんは村の生命ぢや。それなればこそ、華胄の貴公子、三男ではあるが、伯爵の萩原が、たゞ、一人の美しさのために、一代鐘を守るではないか。――

既に、此の人を手籠めにして、牛の脊に縄目の恥辱を与へた諸君に、論は無益と思ふけれども、衆人環り視る中に於て、淑女の衣を奪ふて、月夜を引廻はすに到つては、主、親を殺した五逆罪の極悪人を罪するにも、洋の東西にいまだ嘗てためしを聞かんぞ！

そりや或は雨も降らう、黒雲も湧き起らうが、其は、惨憺たる黒牛の脊の犠牲を見るに忍びないで、天道が泣かるゝのぢや。月が面を蔽ふのぢや。天を泣かせ、光を隠して、それで諸君が活きらるゝか。稲は活きても人は餓ゑる、水は湧いても人は渇へる。……無法な事を仕出して、諸君が萩原夫婦を追うて、鐘を撞く約束を怠つて、万一、地が泥海に成つたら何うする？　六ヶ村八千と言はるゝか、其の多くの生命は、諸君が自から失ふのぢや。

同じ迷信と言ふなら言へ。夫婦仲睦じく、一生埋木となるまでも、鐘楼を守るに於ては、自分も心を傷つけず、何等世間に害がない。

管八。黙れ、煩い。汝が勝手な事を言ふな。

初雄。一体君は何ものですか。

学円。私か、私は萩原の親友ぢや。

宅膳。藪から坊主が何を吐す！

学円。如何にも坊主ぢや、本願寺派の坊主で、そして、文学士、京都大学の教授ぢや。山沢学円と云ふものです。名告るのも恥入りますが、此の国は真宗門徒信仰の淵源地ぢや。諸君のなかには同じ宗門のよしみで、同情を下さる方もあらうかと思ふて云ひます。（教員に、）君は学校の先生か、同一教育家ぢや。他人でない、扱ふてくれ給へ。（神官に、）貴方も教への道は御親類。（村長に、）村長さんの声名にもお縋り申す……（力士に、）な、天下の力士は俠客ぢや、男立と見受けました。……何分願ひます、雨乞の犠牲はお許しを頼む。（此がために一同少時ためらふ……代議士穴隈鉱蔵、葉巻をくゆらしながら、悠々と出づ。）

鉱蔵。其奴等騙賊ぢや。又、騙賊でなうても、華族が何だ、学者が何だ、糧を何うする！……命を何うする？……万事俺が引受けた。遣れ、貴様等、裸にせうが、骨を抜かうが、女郎一人と、八千の民、誰が鼎の軽重を論ぜんやじや。雨乞を断行せい！（力士真前に一同ばらりと立懸る。）

学円。私を縛れ、（と上衣を脱ぎ棄て、）恁ほど云ふても肯入れないなら止むを得ん、私を縛れ、牛にのせい。晃。（からりと鎌を棄て、）いや、身代りなら俺を縛れ。さあ、八裂にしろ、俺は辞せん。——牛に乗せて夜叉

ヶ池に連れて行け。犠牲によつて、降らせる雨なら、俺が龍神に談判して遣る。

百合。あれ、晃さん、お客様、私が行きます、私を遣つて下さいまし。

晃。成らん、生命に掛けても女房は売らん、龍神が何だ、八千人が何うしたと！　神にも仏にも恋は売らん。お前が得心で、納得して、好んですると云つても留めるんだ。

鉱蔵。（ふわ〳〵と軽く詰め寄り、コツ〳〵と杖で叩いて、）血迷ふな！　たわけも可い加減にしろ、女も女だ。湯屋へは何うして入る？……うむ、馬鹿が！（と高笑ひして、）君たち、おい、苟も国のためには、妻子を刺殺して、戦争に出ると云ふが、男児たるものゝ本分ぢや。且つ我が国の精神ぢや、即ち武士道ぢや。人を救ひ、村を救ふは、国家のために尽すのぢや。我が日本のために尽すのぢや。国のために尽すのに、一晩媽々を牛にのせるのが、然ほどまで情ないか。

洟垂しが。俺は了簡が広いから可いが、気の早いものは国賊だと思ふぞ、貴様。俺なぞは、鉱蔵は、国はもとより此処に居る人民蒼生のためと云ふなら、何時でも生命を棄てるぞ。（時に村人は敬礼し、村長は頤を撫で、有志は得意を表はす。）

晃。死ね！（と云ふまゝ落したる利鎌を取つてきつと突つく。）

鉱蔵。わあ、（と思はず退る。）

晃。死ね、死ね、死ね、民のために汝死ね。見事に死んだら、俺も死んで、其から百合を渡して遣る。死ね、死ないか。（とぢりゝと寄るたび、鉱蔵ひよこ〳〵と退る、お百合、晃の手に取縋る。と縋られた手を震はしながら、）然、然らずんば決闘せい。（一同其の詰寄るを、わツわと遮り留む。）傍へ寄るな、口が臭いや、百姓ど

も！　汝等は、其の成金に買はれたな。これ、昔も同じ事があつた。白雪、白雪と云ふ此の里の処女だ。権勢と迫害で、可厭がるものを無理に捉へて、裸体を牢に縛めて、夜叉ヶ池へ追上せた。……処女は、口惜しさ、恥かしさ、無念さに、生きては里へ帰るまい。其方も、……其方も……追つては屠らるゝ。同じ生命を、我に与へよ、と鼻頭を撫でゝ牛に言ひ含め、終夜芝を刈りためたを、其牛の脊に山に積んで、石を合はせて火を放つと、鞭を当てるまでもない。白い手を挙げ、衝とさして、麓の里を教うるや否や、牛は雷の如く舞下つて、片端から村を焼いた。……麓にぱつと塵のやうな赤い焔が立つのを見て、笑を含んで、白雪は夜叉ヶ池に身を沈めたと言ふのを聞かぬか。忘れたか。貴様等。おれたちに指でも指して見ろ、雨は降らいで、鹿見村は焔に成らう。不埒な奴等だ。

鉱蔵。世迷言を饒舌るな二才、村は今既に旱の焔に焼けて居る。其がために雨乞するのぢや。やあ衆、手ぬるい、遣れ〳〵。（いづれも猶予するを見て、）埒明かんな、伝吉ども来い。（と喚く。博徒伝吉、威の長ドスをひらめかし、乾児、得ものを振つて出づ。）

伝次。畳んで了へ、畳んで了へ。

乾児。合点だ。

晃。山沢、危いぞ。（とお百合を抱くやうにして三人鐘楼に駆上る。学円は奥に、上り口に晃、お百合、と互に楯に成らんと争ふ。やがて押退けて、晃、すつくと立ち、鎌を翳す。博徒、衆ともに下より取巻く。お百合、振上げたる晃の手に縋る。）

一同。遣れ、〳〵、遣つ了へ。遣つ了へ。

学円。言語道断、いまだ嘗て、恁る、頑冥暴虐の民を知らん！　天に、――天に銀河白し、瀧と成つて、落ちて来い。（合掌す。）

晃。大事な身体だ、山沢は遁げい、遁げい。（と呼ばはりながら、真前に石段を上れる伝吉と、二打三打、稲妻の如く、チヤリ、と合す。伝吉退く。時に礫をなげうつものあり。）

晃。（額に傷つき血を圧へて）あツ（と鎌を取落す。）

百合。（サソクに其鎌を拾ひ、）皆さん、私が死にます、言分はござんすまい。（と云ふより早く胸さきを、かツしと切る。）

晃。了つた！（と鎌を捩取る。）

百合。晃さん――御無事で――晃さん。（とがつくり落入る。一同色沮みて茫然たり。）

晃。一人は遣らん！　茨の道は負つて通る。冥途で待てよ。（と立直る。お百合を抱ける、学円と面を見合はせ、）何時だ。（と極めて冷静に聞く。）

学円。（沈着に時計を透かして）二時三分。

晃。むゝ、夜毎に見れば星でも了る……丁ど丑満……然うだらう。（と昂然として鐘を凝視し、）山沢、僕は此の鐘を撞くまいと思ふ。何うだ。

学円。（沈思の後、）うむ、打つな、お百合さんのために打つな。

晃。（鎌を上げ、はた、と切る。撞と撞木落つ。）

途端にもの凄き響きあり。――地震だ。――山鳴だ。――夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。夜叉

ヶ池の上を見い。真暗な雲が出た、――と叫び呼はる程こそあれ、閃電来り瞬く間も歇まず。衆は立つ足もなくあわて惑ふ、牛あれて一蹴りに駆け散らして飛び行く。

鉱蔵。鐘を、鐘を――

嘉伝次。助けて下され、鐘を撞いて下されのう。

宅膳。救はせたまへ。助けたまへ、（と逃げまはりつゝ、絶叫す。天地晦冥。よろぼひ上るもの二三人石段に這ひかゝる。）

晃。（切払ひ追ひ落し、冷々然として、峰の方に向つて、学円と二人彫像の如く立ちつゝあり、）波だ。（と云ふ時、学円ハタと俯伏しに成ると同時に、晃、咽喉を斬つてハタと倒る。）

白雪。（一際烈しきひかりものゝ中に、一たび、小屋の屋根に立顕はれ、忽ち真暗に消ゆ。再び凄じき電に、鐘楼に来り、すつくと立ち、鉄杖を丁と振つて、下より空さまに、鐘に手を掛く。鐘ゆら〳〵と成つて傾く。）

村一同昏迷し、惑乱するや、万年姥、眷属とゝもに立ちかゝつて、一人も余さず尽く屠り殺す。――

白雪。姥、嬉しいな。

一同。お姫様。（と諸声凄し。）

白雪。人間は？

姥。皆、魚に。早や泳いで居ります。田螺、鰌も見えまする。

一同。（哄と笑ふ）はゝゝはゝゝ。

白雪。此の新しい鐘ヶ淵は、御夫婦の住居にせう。皆おいで。私は剣ヶ峯へ行くよ……最うゆきかよひは思ひ

のまゝ。お百合さん、お百合さん、一緒に唄をうたひませうね。

（忽ち又暗し。既にして巨鐘水にあり。晃、お百合と二人、晃は、龍頭に頬杖つき、お百合は下に、水に裳をひいて、うしろに反らして手を支き、打仰いで、熟と顔を見合はせ莞爾と笑む。時に月の光煌々たり。）

学円。（高く一人鐘楼に佇み、水に臨んで、一揖し、合掌す、月いよいよ明なり。）